

2017年6月25日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネ福音書21章20節～25節

21:20 ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、裏切るのはだれですか」と言った人である。21:21 ペトロは彼を見て、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と言った。21:22 イエスは言われた。「わたしの来るときまで彼が活着ていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」21:23 それで、この弟子は死なないといううわさが兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスは、彼は死なないと言われたのではない。ただ、「わたしの来るときまで彼が活着ていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか」と言われたのである。21:24 これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている。21:25 イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。

説教 『神が賜わる各自の使命』

◆昨日、大阪の長居スタジアムで陸上の日本選手権がありましたけれども、見られましたか。わたしは若い頃、陸上競技をしていましたので観ました。日本人が初めて10秒を切るかどうか期待のかかった一戦でしたが、生憎の雨天でダメでした。スポーツはライバル同士がしのぎを削って上達します。

◆さて、今日の聖書にはペトロとイエスの愛しておられた弟子が出てきます。この二人はライバルだったのではないか。ヨハネによる福音書では、本当にこの二人が対になって出て来ます。イエス様が捕えられ、大祭司の館で尋問を受けておられる時、その大祭司の館までついて行ったのはペトロとこの弟子の二人だけです。「イエスの愛しておられた弟子」は大祭司の知り合いだったので、その館の中庭に入ることができました。ですから彼はエルサレムの出身だという事がわかります。一方、ペトロはガリラヤ出身の元漁師で、今、尋問されているイエス様の弟子ですから、中庭には入れない。そこで、もう一人の弟子が「私の知り合いですから中に入れてください」と頼んでく

れたので、ペトロも中庭にはいることができました。そこで「あなたはあの人の仲間でしょう」と疑われます。するとペテロは、「その人の事は知らない」と三度、イエス様との関係を否認します。そのように、ペテロがイエス様を否認した時、そこにいたのはこの「イエス様が愛しておられた弟子」だけなのです。しかしこの人は、このことを口外しませんでした。

◆そして今日の箇所直前の箇所で、イエス様は「あなたはわたしを愛するか」と、ペテロに三度、問うておられます。「誰よりも、どんなことよりも、自分の命よりも、わたしを愛するか」と。「三度もイエス様が『わたしを愛しているか』と問われたので、ペトロは悲しくなった」と記されております。そのようにしてイエス様は、ペトロの取り返しのつかない裏切りを、拭い取られて行きます。「私は失われた者を捜して救うために来た」とイエス様は言っておられますが、この「失われた者」は、文字通りには「完全に滅んだ者」と云う言葉です。(参照、ルカによる福音書19：1～10)。このやり取りはイエス様とペトロの二人だけのやりとりです。

◆今日のところにもどります。ペトロが何かの気配を感じたので後ろを振り返りますと、「イエスの愛しておられた弟子」がついてくるのが見えました。少し距離があるという感じですね。そしてイエス様とペトロのやり取りが具体的には知りません。他の聖書には「あの夕食の時、最後の晩餐の時ですね。イエス様の胸元によりかかったまま『主よ、裏切るのは誰ですか』と言った。今わたしと一緒に食事をしている者の中にわたしを裏切る者がいる」とイエス様は言われたのです。ですから裏切る者が誰であるかということは他の弟子も知らないわけです。イエス様が尋問受けている時に大祭司の館の庭まで入って行ったのはペトロとその弟子二人だけなのです。この弟子が出てくる時には、この弟子についてはいつも「イエスの愛しておられた弟子」と記されています。この表現はイエス様が本当に彼を愛しておられたことを表わしていますね。

◆この人は、「大祭司の知り合いだった」というふうで紹介されていますね。相当な家柄の出だったことが想像できるわけです。しかしイエス様のお墓に行く時も。ペトロが先に走って行く。いつもペトロが先でこの人は後からついてゆく。ペトロの三度の否認のことも知っているのはこの人だけでした。

しかし彼はそのことをだれにも言いませんでした。

◆それで今日箇所でも「ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついてくるのが見えた」と書いてあります。彼は常にうしろなのですね。それで私は、イエス様がこの弟子を本当に愛されたのはここにあるのかなと、思いました。確かに大祭司の庭で、ペトロがイエス様との関係を三度否認し、鶏が鳴いて、そしてペトロが外へ出て大泣きしたというふうに書いています。それを知っているのはこの弟子だけなのですね。けれどもわたしは、この人のペトロに対する尊敬、敬愛の念は、この三度の否認にもかかわらず、崩れなかったと、そのように思います。なぜならば、今イエス様が受けておられる尋問は、十字架刑を前提にした尋問ですから、ペトロが、尋問を受けておられるそういう場に行かなければ、人からあなたも仲間だというふうなことを言われることもないわけです。ところがペトロは自らそういう厳しい状況に入って行ったわけです。だからぎりぎりの所で、イエス様との関係を否認するという、思ってもみなかったような事態が生じたのです。けれども、この「イエスの愛しておられた弟子」は、状況が分かるというか、人間が分かるというか、否認したのは事実だけれども、否認するような厳しい状況の中にペトロさんが入り込まれたのだという、ペトロのイエス様に対する忠誠心というものを、この人は認めたのだと思います。それをここにも見ることが出来ますけれども、この人が、イエス様に出会ってからのことをずっと見ておられて、イエス様は、この人を格別に認めておられたのではないのでしょうか。イエス様は本当に彼を愛し、信頼するようになっていかれた。

◆私達人間には1番を目指すというところがありますね。スポーツだけではなくて、どの分野でも。自分の存在意味が認められる。その時に、わたしたちは喜びを感じ、やりがいを感じ、さらに一生懸命仕えようとする。それが人間の存在価値というか意味。その自負心に宿して生きて行ける。人間、誰もそういう所があるのでないか。そういう認められるというものがなかったら生きていくのは辛いと思います。

◆けれども、そのちよつとが違つと、1番でないといふ気が済まなくなる。先日来、使徒言行録を読んで来ておりますが、初代教会は大方が貧しいひとたちしたから、持てる人は財産を、土地を売り払ってささげ、みんなが共有して

いたわけです。ところが5章の1～11節に、アナニアとサフィラという夫婦の話が出ています。かれらは資産家だったのです。土地を売った代金を教会に献げるのです。ところが、アナニアとサフィラ夫婦は、土地を売った代金の一部を取っておいて、教会には、これが全額ですと言って献げたのです。◆それが、ペテロの知るところとなり、「なぜ神を欺いたのですか」とペテロに言われ、アナニアはたちどころに息が絶えたと書いてあります。そのことを知らないで数時間後に妻のサフィラが来て、「あの献金はしかじかのものですか」と聞くと、「そうです」と答えます。ペテロは「二人で示し合わせて、神を欺むくとは何事ですか」と言うと、サフィラもたちまち息が絶えるのです。そのような厳粛な話が出ています。アナニアとサフィラ夫婦は、やはり一番でない気がすまなかったのです。しかし主の教会では、そのような欺きは通湯しないのです。ですから初代の弟子達は、本当に神様を畏れ、十字架に死なれ、甦られたイエス様の御臨在の中で生きたということです。◆自分の存在の意味の確認と人に認められたいという思いの、微妙な所で、生死の違いが出てくるのです。それが本当に全体の益になるというあり方というものがあると思いますね。イエス様の愛しておられた弟子は、イエス様御自身が生きて示されたその道に従ったのです。主イエス様は人に仕えるということにおいて特別なのです。無比なのです。どこまでも人に仕えられるのです。イエス様は人一人の存在を、どんなことをしてでも認め、生かす。◆わたしたちが聖書を読む時の読み方は、この自分に宛てる遺言を読むようには読んでいない。聖書は削れるものは全部削り、これだけはどうしてもという所だけを記しているのです。一言一句、自分の命にかかわるものとして、読まねばなりません。わたしたち各自に与えられている賜物に従って、御心に適う奉仕をもって、主と教会に仕えて行きましょう。

◆お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様

あなたは、私達の様々な思い、全てを知っていて下さってわたしたちの為に最善の導きを与えていて下さいます。その事を新たに覚え、感謝いたします。どうか御心に適い、主イエス様に従う歩みをなさしめてください。この祈りイエス様のみ名を通しみ前にお奉げ致します。アーメン